女學叢誌

驛遞局認可　明治十九年一月九日　毎土曜日發兌　第四號

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第四號目次

●女子に猛省を促かす●處女の粧飾●商客●和英語羅馬字對譯數件●内外烈女傳●佛國孝女ヱリサベッスの傳〔承前〕●表書奴の小萬ノ傳●崔簡が妻の勇決●李衡が妻の明●和琴●琴●箏●徹書記の茶話●雅言略解〔承前〕●食卓を飾る花瓶の手工●圖畵〔承前〕●啼鳥●月次御歌會●慶新會の唱歌●分栽告春●風流の主從●實定冠り落せし話●火を弄ぶ癖●西洋隱語●其の二●鶴の昔し語り●筆のまに〳〵●小間物屋の事●手形の事●月待日待ハ月祭日祭なる事●懸想文の事●鴫立澤●つれ〳〵草講義●内外雜報●廣告

明治十九年一月九日

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區内郵税不申請

明治十九年 女學叢誌毎土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一行至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一行至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一行至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一行至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に内規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附あらんことを希ふ○郵券代用ハ御斷り申上候爲一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞

郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替劵を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區内ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎女學雜譚

○女子に猛省を促のす

富春漁父

我邦に女學の起りしハ實に日あさきが故に普ねく女流に行わたらざるハ論を待たず是を以て縉紳以下の妻女及び令孃の中にハ未だ眞に女學の効用を知らざる者あり此れ我邦將來の文明進步に於て容易ならぬ大事とや申すべし就中下等人民の婦女に至りてハ女學の何者たるを知らず又婦人ハ學問すべき者に非ずと斷定するの父母も有て常に其愛兒をして醉生夢死の境に陥らしむる者あり豈に慨嘆の至りならずや蓋し下等人民の思想の斯の如きハ獨り我邦のみならず文明を誇唱せる歐米中別て文明の中心と自稱せる佛蘭西の如きも往々此弊を免かれずして爲に識者をして其眉を顰ましむるに至れり玆に佛人ル、ハルテイト、フウリュー氏が下等人民の婦女目今の風俗てふ論を掲げて我國女流に猛省を促がしめんとす曰く現今佛蘭西に於て職工の妻女の如きハ一般に讀書算術寫字等を知る者なし蓋し其父母たる者其兒女をして自家の用辨を致へ導びくの外敢て他の教育に心を用ひざれバなり是れ或ハ其土地に女學校の設けなきに由るの然らされバ其幼稚して未だ確なる思慮なき時僅かに一二の數字を讀或ハ之を書することを學ぶと雖へども筆墨紙料の供へなく且つ之を學び習ふ場合なきを以て其覺へし業も亦直ちに忘るゝの致す所ろならん

斯の如き事情なるを以て嘗て其父母ハ其兒女をして寵愛したる兆しなく兒女ハ常に不良友垣と喧噪なる戯れを爲し且つ其技藝に從事するも亦唯だ誹謗の語を吐き賤惡の行を爲すのみ斯の如き不良不善の慣習に薰染して苟且にも能く其天稟の鋭敏なる良能を保存し或ハ其良人及び兒子を親愛するに適當なる誠意を失なハざるとを得ば誠に僥倖と云べしと雖ども到底醉生夢死の不幸ハ免かれ可らざるなり

父母たる者慈愛奬勵又ハ賞擧等の如き善良の方法を以て其兒女を教育せずして反て種々正しからざる言行を見せしめて識ず知らず之を教へ甚だしきに至りてハ罵詈打着等の如き粗暴しき譴責の中に其兒女を成長せしむるが故に之をして純良ならしめんと欲するも得べけんや此等の人をして正直に歸せしめんと欲せば其初め之を不正に導びきしより更に一層嚴酷なる教育を與ふるに非れば恐らくハ他に之を療すの藥石なかる可し夫れ下等人民の婦女ハ其兒女の爲にハ不善の教導者たるに過ずして其温容と說論とを以て誘導すべき行儀作法に於て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も亦た過激の叱咤及び虐き扱かひを以て之を强迫するに至る
○斯の如き悪風俗を爲すハ固より勢の已むを得ざるもの有と雖ども亦た豈に傷むべきとにあらずや
凡そ父母の其子を育つるに不善なれば其子も亦父母を敬愛するの道を知らず蓋し父母其子を導びくに善行を以てせず又た之を寵愛するの道を知らされば其子の頑愚邪悪に傾むくハ固より必然の理なり故に斯る兒女ハ其母の爲よ幸福快樂の基礎となちずして却て憂苦悲傷を釀成するの具となるも亦齊しく其母の教育如何に由る所なり
夫れ人の母たる者已に其子の爲よ幸福快樂を受くるとなくんば果して其良人に由て之を受くるとを得べき乎是れ決して能ハざるなり蓋し其良人ハ初めより酒色に溺るゝが如き不行跡に非ずと雖ども日々家職を勉め業を終りて家に歸るに當り若し我婦の粗暴無狀にして自分の倦怠と財産の欠乏と其子の喧噪の爲よ發する所ろの憤怒を以て良人に加ふるが如き行爲を見ると有ば之が爲に其勤勉なる精神も忽まち一變して終に酒色に沈溺する不行跡となるハ往々に在る所にして是れ即ハち其妻女たる者一も善良なる說話なく一も温柔なる容貌なく一も喜こぶべき敬禮なく一も從順なる愛媚なく一も愉快なる思もちなくして其良人を安撫愛敬するの心意なきを以て良人ハ己を得さる事故あるに非れば其家に在るを快に心よしとせず多くハ朋友と共に酒樓に登り歡娛を盡し以て其鬱憂の氣を散せんとするよ至るなり

以下次號

◎歐米女學の枝折

○處女の粧飾

抗月嶺風樓主人譯

此の遊戯ハ衣服飾りの品目を覺ゆるに必用の者にて歐洲の童女社會に於て盛んよ行なハるゝ慰みたり此遊戯を爲そには第一に先づ其友垣と此慰さみ中よ約したる色の外ハ他の色を云ふ可らざるを以てすべし若し誤まつて其禁じたる色を話しの内に云ふ時ハ罰金(菓子又ハ他の物を出を云ふ)を出さしむる約束を定む假令バ最初淺黄赤及び紺の色を禁じ而して一童女あり他の童女に對して妾ハ我兒をして舞踏せしむるとき衣服の色合ハ何が好からんやと此時他の群童女ハ銘々に何々の色合が可るべしと答ふ其答若し誤て禁する處の色を云バ則ハち約束の罰金を出さしめ之を他の童女に分ち與ふとす其方法左の如し
阿梅姐曰く妾茲に禁ずる所ろの色合ハ何等の色合を以てそべくや阿松姐曰く宜しく黒色を禁ずべし阿竹姐曰く一色に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

てハ何ぱ足らず白色も禁じ給ふべし

此にて禁色定まりたれバ之を群童女に傳へて此の二色を云ふとなからしめ而して阿梅姐また曰く

妾ハ我兒をして舞踏を爲しめんと存ず其衣裝ハ何色を用ふべきや　阿松姐荅て曰く淺黄鼠の裾模樣ある上蓋衣にそよけれ　阿竹姐次に荅て曰く羽織ハ紅かけ空色の一ッ絞こそよけれ　阿鶴姐次に曰く茶錦襴の帶を結給へかし　阿龜姐次に曰く半襟ハ白こそよく似合申すべけれ

阿梅姐阿龜姐の語を聞て則ハち曰く

嗚呼阿龜姐ハ既に一の禁色を云り何と申せば白色ハ云ふとを禁せり何が故に白襟を云しや。

阿龜姐之を聞て大に驚ろき

噫妾ハゝ何故に黒襟と云ざりしの〔此時他の童女ハ大に之を笑ふ何となれバ。少女にして黒襟を掛るとなければなり〕

此時再阿梅姐曰く貴女の語よろしからず黒色もまた白色と同じく禁じたるにあらずや

阿龜姐茲に於て誠に貴女の語の如し皆妾の過まちなり妾ハ此の剪刀を以て罰金として差出し申すべし而して妾の罰ハ之にて償のひ終りたれば更に前の如く此の慰さみを爲さん

時に阿花姐曰く吾兒ハ黄八丈の羽織を着せてよろしきや　阿香姐次に曰く吾兒をして舞踏せしめんにハ其袖の膨脹が爲に斜子地を用ひ色ハ淡紅ひに染んとす　阿妻姐曰くよろしく白山羊の毛を以て造れる手袋を用ひ給ふべし

時に阿梅姐之を聞て貴女ハ白山羊と云り然らば第二の罪人なり　阿妻姐荅て曰く貴女の語ハ誠に然りと雖ども舞踏の時ハ決して色ある手袋を用ふる人なし　阿梅姐之を駁して曰く若し果して然らば貴女ハ其手袋のとを言ざるに若ず

是に於て阿妻姐ハ其理に服し然らば此の釵を差出して罰金と爲すべし次に　阿菊姐曰く吾兒をして舞踏せしめば深紅色の花釵を以て其頭髮に插しむべし

是に至て阿梅姐ハ景容詞を用ひて賞美して曰く美くしき色の既に集まれると斯の如し貴女の御子ハ實に艶麗なる數種の花を束ねる者の如くあるべし　阿春姐曰く朱鹿子の帶〆を用ゆべし　阿夏姐曰く吾兒の如きハ黒の洋服に束髮にて舞踏させんと欲す

時に阿梅姐曰く黒の洋服なる哉黒色ハ即ハち阿夏姐も亦た禁色を云り　阿夏姐曰く妾の西洋婦人を看るに皆な黒色なり黒色を云ざれば決して洋服を云ふ能ハざるなり　阿梅姐之を駁

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

して曰く豈に黒色のみならん是れ貴女の見聞狹きが故なり貴女ハ何を以て罰金とし給ふ　阿夏姐曰く誠に然らば妾ハ此の護謨鞠を以て罰金に充ん

時に阿梅姐曰く貴女輩の語の内を取りて吾兒の舞踏衣裝ハ全たく整のひたり是より姐松阿ハ是迄での注文に返し更に貴女の兒の舞踏衣裝を云ひ出し給ふべし

是に於て又禁ずる所ろの色を定め阿松姐ハ又群童女に向ひ問ひを始むると前條の如くす

但し罰金ハ骨牌又ハ雙六に用ふる菓子等にして之を犯則ならざる童女ハ分るを善とす

○商客

此遊戯ハ物品の性質を覺ふるに於て最とも有用の慰さミとす之を爲す方法ハ群童女銘々商人となりて我ハ陶器商なり妾ハ呉服商なりと云ひ出し而して其云ふ所の物が動物か將た植物か又ハ鑛山物に屬するかを問次坐の童女ハ必らず之を荅ふる事とす而して若し其荅へ誤まるとあれば商人と爲りて他に質問するの權を褫ハれ常に荅辭に苦しむの位地に立ち又よく的中の荅辭を爲せバ誤まる人を越て早く商人となりて他を質問して困却すの權ある者とす其例下條の如し　〔以下次號〕

◎和英語羅馬字對譯

いろはがるた

Iroha-garuta

Iroha-cards

犬もあるけば棒にあたる

	イヌ	モ	アルケメ	ボウニ	アタル
(羅)	Inu	mo	arukeba	bō-ni	ataru

	アズ	ドッグ	ゴース	エロング	アンネセッサリリー	ヒー	ツイル	ミート	ウイズ	ジ	クラツブ
(英)	As	dog	gose	along	annessarily,	he	will	meet	with	the	club.
	ユヱニ	犬ガ	アル	ク	無用ニ	彼ガ	アラフ	デ	アウデ		棒ニ
	五	一	三	四	二	六	十	八	九		七

論より證據

	ロン	ヨリ	シヤウコ
(羅)	Ron	yori	shōko.

	フアインド	ジ	プルーフ	アンド	ドント	グラウンドレッスリー	スピーク	アバウト
(英)	Find	the	proof	and	do'nt	groundlessly	speak	about.
	見出セ		證據	ソウシテ	ナスナ	意證ナク	ハナ	シ
	二		一	三	七	四	五	六

◎内外烈女傳

○佛國孝女エリサベッスの傳　〔承前〕

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雲は慘澹として常に愁ひ風は蕭颯として長く悲しむ茂林に群がるの烏は其聲惡しく塒を急ぐの雀は其鳴くこと憐れなり茲にエリサベツスの父は思ひもうけぬ災禍に今は囹圄に捕らわれて罪も死刑と定まれバかくあることも長からじと無念の涙せきあへず鐵の格子を握り詰め躍り狂うて怒れども早爲術もあらざれバ唯だ是迄と諦らめしかど諦らめ難きハ親子の情にて獨りエリサベツスの事を思ひ出で嗚呼可愛の者よ如何しつらん定めて案じ居るならん母にも先立れ兄弟とてはなし唯だ頼みにする吾が又も此世を辭するなれバ軟弱き女子の一手にて何往末を爲しぬらん路頭に食を覓むるか若し左もあらぬ其時は飢死の外術なからんと矢竹心

五十五

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の張も折れ𥧄圄の格子に取そがり我家の空を打詠め不覺の涙に沈ミける折節東所西所と覘ひ來る女の有ければ怪しき事のなど瞳子を定めて熟視れバ混ふべくもあらぬエリサベッスなれど思はず聲を揚げ吾女か吾女か父ハ此處に居ぞよと云ふを聞きエリサベッスハ馳寄りて格子へ手を入れ父の手を握り何と云べき言葉より先だつものは涙のミ稍々と頭を揚げ親爺さん悲しい事になりました妾ハ何と致しませう去れバとて暗々と虎狼に等しき暴人づらの手に掛り御果なさるの忌々しければ何とかなして𥧄圄を遁れ身を潜し時の來るを待玉ひなば千に一つハ恙ハなく免かれ給ふ便りもあらん明日ハ必らず道具を携へ參る程に此處を破りて出給へ妾ハ彼處に待程に耳に口寄せ私語て逸足早やく出去りぬ斯てエリサベッスも翌日游暮を待て再たび監獄舎に至り衣物の裙より手頃の刀鋸を出し何か打示し必らず逸まり見認られ給ひなど言ひ殘し家路を指して馳戻り我手に合ふ衣類道具を包みとなし約せし場所へ立去りぬエリサベッスの父ハ女の情にて刀鋸を得たりければ心の内に上帝を祈念しつゝ徐かに𥧄圄の格子を斷始めしに天帝此孝女の志を嘉し玉ひけん恰かも好し雨痛く降いて之に加ふるに暴風ふき起り家を搖かし樹を震ひひと凄ましき景狀ハ監守の巡視も怠たり且つ𥧄圄を破る音の更に漏ざれバ思ひの儘に斷畢せ外面に立いで嚴そかなる二重の堀を乘越へ風雨に混れてパリスの郊外に落延びたりエリサベッスハ人里離れたる百姓家に待うけ之を見るより手早く包を解きて着替しめ互に雨具を裝ひ其家を辭して出たるに風雨とも幸ひ全く歇て十三夜の月ハ皓々として森林の上に昇り飛ふ螢ハ田の畔を照し戰ぐ稲葉も追手かとエリサベッス親子ハ氣も空に里英十五里か程も遁れ去り荒山里に嘗て巳れが家に出入したる農夫の有けるを頼み父を其處に托し我身ハパリス近くに立歸り知巳の許に身を隱し世の形勢を窺がひゐしに政府も巳に共和黨の建る處となり漸々穩やかに爲りたる故父の心も貫ぬき難しと世をわだき無く思ひしが其も儲置き身代家産とも共和黨に取揚げら此將來の活計も殆んど困じ果て奈何そべしと思ひを苦しめしかど爲す術なく二月三月の日を經ばど今もはや親子とも辛苦云ん方なく朝た夕べの餔さへも自由ならぬ迄で窮し果て今ハなましいに生遁れしを怨つ事とハなりけるがエリサベッスハ奮然として思ふ樣親子飢死したらんには切角の難艱も水泡となり何の詮なき事なれバ若ず命を犧牲にし父の命乞して家産を申し乞はんにハと乃ちパリスへ立戻り共和黨の威權ある

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

將の館に至り對面を乞ひ從容に俯伏して申す樣妾ハエリサベツスパアノンと申せ者に候か吾父ハ嘗て閣下方の疑ひを蒙むり共和政治を距む者と見做し給ひ過る七月捕られて囹圄の裏よ繫れ給るを妾唯一途に親の命を扶けバやと女達らの膽太くも外面より囹圄を破り父を救ひ出し今は某の地に潜まひ置き候らひき去るに妾ハ女子の身ゆへ父を養なふ術を得しらす身代家產ハ疾よ官に沒收せられ內に活計の代に充る物品なく外に貢ぎ呉べき親族も無く妾父子の命旦夕に迫り唯だ飢死を待のみなり之をして花見ならし况ば公けに京城に立て食を乞ふ術あるも其身罪人なれバ市よ渉る事あたばず斯れバ一旦虎の顋を遁れしと雖父をして餓死なさしめば是妾の殺すなり妾の悲歎父の囹圄に在し日より甚だしく妾の不幸父を救ハざるの日より大なり將軍閣下仰ぎ願くハ妾の心の切なるを憐れみ妾の不幸を察せられ玉ひかし妾ハ已に囹圄を破るの罪あり故に妾の身は車裂の刑に處せらるゝも死して恨みなし唯だ將軍よ無辜の我父の命を救ひ玉へ將軍若し妾の言を納玉ハゞ妾死して將軍の榮福を祈り仁慈の惠みに報ふべしと淚と共に請けるに其將惻然として不覺にエリサベツスの孝烈と其薄命に痛く感覺を刺衝され卿の乞ふ所我能く計らふて望みを果さしめんと切に事情を以て上官に告げ父の罪を全免し併せてエリサベツスを庇惠み遂よ沒收せし家產を還へし與へ深く其孝心を嘉稱したりと云ふ

○表書傳 〔四〕

奴の小萬ノ傳

奴の小萬とハ即ハち劇場に於て假託する名にて其實の名ハ阿雪と云ふ大坂長堀の豪商某氏が妾の子なり幼稚より親族三好氏に養なハれ成長するに及びて養家婿を擇びて之に妻ハせんとせしに阿雪其庇扁るを忌み宜なハず且つ自から復た人の妻とならさるを誓ひぬ既にして幾干もなく養父死たりければ阿雪其家產を受嗣しかども性質任俠にして之を整理するの心ろなく只だ閑よ就て書畫を柳澤淇園翁に學習し側ハら擊劍柔術等を學ぶ。人と爲り色あく迄白く且つ肉肥て殊に力あり常に二人の家婢を從かへて逍遙す其家婢も亦た勇よして主よ讓らず阿雪家婢共よ年三五の春に在るを以て無賴の少年等之を通常の女子と蔑どり徃々途に於て戲むれ挑むと屢々なりしが其都度投て之を懲し再た狼藉の擧行なからしめたり時に南地郊外に蛇兒坂と云ふあり當時荒僻にして刑棘道に横たはり梟鵂らとする程なるを以て晝といへども徃來頗ふる稀なり阿雪主

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

從事ありて曾て此處を過しに果して二個の盜人ありて途を遮ぎり衣服を奪はんと强迫したりければ主從にて擊て之を仆し悠然見向もせずして去りしかば此事誰いふとなく大坂中に傳播し惡漢ども途に阿雪主從を見れば則ち途を變じて之を避たりと云ふ。阿雪既に所天なきが故に官女と爲りて大内の有樣を拜觀せんと欲し書を善くせるを以て長橋の局の祐筆となり勤仕すると五年頗ぶる禁廷の故事有職を諳んず既にして歸り世事我に於て關係ふとなしと剃髮して尼と爲り天王寺の側はら月江寺に居る其母の紋所菊水を付るを以て自ら之を用ひ遂に楠 正成の子孫なりと稱し又三好氏を名乘を以て長慶の苗裔と云ひ名を正慶尼と自稱し常に白綸子の法衣を着し前の家婢と共に佛事を修す時に月江寺に開扉ありて都下の士女群詣し頗ぶる繁昌を究む一日會々大雨參詣の人々困却す一方ならず正慶尼直ちに傘千本を買ひ之を施與す又一日寺に大法會を設け伶人を延て樂を奏し莊嚴齊供盛んを盡したれば或人訝しんで之を問しに我家關白秀次公の二百年忌を營なむのみと又竊かに金を京師の方廣寺に喜捨し我が爲に豐臣大閤を弔し給へと其行爲常に斯の如くなるを以て家產稍やく傾むき萬事意の如くならず遂に庵を難波村に結びて老を養なふ其門に一棺を置き日に客を會して饗應談話す一日夏天暑を犯して出て街上に死す市人皆正慶尼なるとを知るが故に爭ふて其家に告け遺骸を尼が常に酒を買ふ所の家に寄せ斂むるに夫の門頭の棺を以てし幽泉寺に葬むる年七十五家婢阿龜阿岩二人亦合葬せしとぞ

記者曰女子にして一意斯の如きは敢て賞擧すべきに非ずと雖ども氣象の盛んなる見るべきあるを以て茲に揭けぬ

○崔簡が妻の勇決

唐の滕王極めて淫乱なりしかば其臣下の妻は悉く威迫せられて獨りも操を破らざるはなかりき。時に王典籤崔簡の妻鄭氏の美なるを聞き妃の召と稱し之を宮中に喚しむ崔簡大に憂て曰く遣ずんば王の怒りに觸れん遣らば必らず王の辱かしめを受ん鄭氏之を聞て曰く良人憂ふ可らず妾自つから思慮ありと遂に宮中に入り門外の小閤に進む滕王内に在りて其入るを見るより直ちに之に迫らんとせしかば鄭氏は左右を顧みて無禮者と罵しりたるに王揚言して朕は王なりと云ひ尙ほ迫らんとするを見て鄭氏益々怒りを見し我が唐の大王何ぞ斯る不作法を爲す者ならんや汝は必らず王家の奴輩ならんと履る靴を脫き散々に王の頭を撲て之を破り尙ほ顏を抓て血を流したり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

王妃遙かに其音を聞て出來りけれバ鄭氏默禮し乃ハち辭して歸るを得たり王是に於て大に愬ぢ政堂に臨まざると旬日崔簡毎日參朝して敢て門を離れず後ち王傷愈政堂に坐す崔簡前に向ふて謝しければ王甚はだ愧殿中に却くと月餘日にして後ち出づ。諸官の妻の嘗て喚入られし者悉く之を羞たりと云ふ

○李衡が妻の明

丹陽の太守李衡數々事を以て瑯琊王孫休を辱かしめければ其妻習氏深く憂ひて之を諫めたるに更に聽かず孫休位に卽に及んで李衡果して憂懼し爲ん所を知らず妻の曰く王ハ素より善を好み名を慕ひ給へり況んや今自から天下に顯ハれんと欲し給ふ時をや何ぞ私しの恨を以て君を殺さん君よろしく自縛して獄に至り前の失言を表列し明らかに罪を請ひ給ふべし斯の如くんば却て優待せらるべし止だ活のみにあらざるなりと李衡其の語に從がいて詣る吳王果して詔して曰く丹陽の太守李衡往事の嫌疑を以て自から司獄に拘ハる朕の治むる所ろにあらず其れ衡を遣て郡に歸らしめよ。遂に罪を免るゝを得たり

記者曰く鄭氏習氏の如きハ絕てなくして稀に見る所ろなり

○女學

○和琴

和琴の初めて書に見ゆるハ神代の卷の大穴牟遲神の段に卽取持其大神之生大刀生弓矢及其天詔琴云々又出雲風土記に飯石郡琴引山古老傳云此山峰有窟裏所造天下大神之御琴。長七尺廣三尺厚一尺五寸。又在石神高二丈周四尺故云琴引山と是等最とも古き傳へなり降りて仲哀天皇紀に天皇控御琴又神功の段に皇后親爲神主則命武內宿禰令撫琴とあり又應神天皇の紀に初枯野船爲藍薪燒之日有餘燼則奇其不燒而獻之天皇果以令作琴。其音鏗鏘而遠聆。と見え古事記にハ玆船破壞以燒鹽取其燒遺木作琴と有り本居宣長の曰く躰源抄に箏のこう〔甲〕の木ハ舊記に云く鹽風に吹れたる日あたりの孫枝を用ゐるべきなりと云り。後漢書蔡邕傳に吳人有燒桐以爨者。邕聞火烈聲知其良木因請而裁爲琴果有美音。其尾猶焦故時人名曰焦尾琴と是等和漢同日の話しと云べし以上を和琴の始と爲そ

○琴

琴の我邦に傳ハりしハ雄略天皇の紀に十一年秋七月。有從百濟國逃化來者自稱名曰貴信又稱貴信吳國人也磐余吳琴彈壃手屋形麻呂是其後也とありて之を始めとするが如し集解に按職員令集解雅樂寮有琴師箏琴師蓋天武之朝撰紀之時。磐余所有

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

呉琴師也と記載せり本居宣長の記傳には後に漢國より此類の樂器渡りて御國には倭琴彼國には唐琴と云りとあり彼の雄略記に伊勢釆女が彈するは呉琴とて唐琴なり國歌に合したる
知るべし

○箏

今の世に行なはるゝことを琴とするは謬まりなり此は源氏物語に箏のことと云ものにて和名抄琴瑟類に。風俗通云神農作箏〔組耕反俗云象乃古止〕或曰蒙恬所造秦聲也。蒼頡篇云箏形似瑟而短有十三弦と是なり通證に「ツクシコト」箏を云ふ宇多帝の時筑紫の石川の色子といふ命婦。彦山にてもろこし人に習ひ妙術ありて名を得たりと見ゆ。今世に云ひ傳ふる所ろも筑後善導寺の僧法水より出たりと爲せり然れども是れ小曲を彈ずる者にして樂箏とは異なり明月記に箏長さ六尺三寸と見ゆ又元祿板の琴曲抄の自序には文治の頃やんとなき人の御手につたへて秘し給ひしを。此人筑紫に趣むき給へる時筑後國善導寺の僧侶。世のすき人にて。せちにこひて此秘曲をつたはり得て。肥前國の住人。賢順居士といふ人に付與せしむ賢順又同國諫早住慶岩寺の僧玄恕にゆるし給ふとなん云々法水と云ふ者を遣はす。こゝろみ給ふに。なぞらふべくもなく劣りたる手つきなれば〔中略〕爰に八橋検校たま〱法水に逢て筑紫琴を習ふ。かくて亦肥前國に遊びて玄恕に随ひ身に妙曲を傳て國手無雙也。八橋思へらく彼筑紫琴は其聲最雅にして俗耳に遠しと終に是に淫聲を加へて新に十三曲を出す十三組と云ふ是なりとあり此にて今のことは箏にして且つ其調曲の中古の樂箏にもあらさるを知るべし

○徹書記の茶話

匠作の家にて夏樹の鳥に

時鳥また一聲になりにけり己が皐月の杉の木がくれ

時鳥又一聲になりにけりと云たるが少大なるなり千聲百聲といひたりとも少さきとも侍るべきの

途中契戀に

宿りする一村雨をちぎりにてゆくへもしほる袖の別れぢ

と讀はべりしを飛鳥井殿も褒美ありしなり

定家の申されけるは歌を案せんときは常に白氏文集の故郷有母秋風涙。旅館無人暮魂雨。の詩を吟せよ此詩を吟ずれば心かたきけだかくなりてよき歌の讀るゝなりと侍り

○雅言略解〔承前〕

〔ほ〕ほのもしりぬや　仄にも知ぬるか也○ほつゝしめなは

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

帆柱に筒をつけて帆綱を風に由り上下するを云ふ○ほだし　物の離れ難を云ふ

〔へ〕○べら　可也　○へし　上に同し

〔と〕ともの子めき　友垣と打騒ぐ意○とゞろ　動也○とことは　常住不變の義○どよむ　騒ぎ動く也○ときずともあく　何ともなき也○とまで　田苅手なり。秋田かるとまで共云ふ○とよのみそぎ　大嘗會の御禊也○ともまつゆき　降し雪の消ずしてまた降雪なり○となりのふえ　向秀期と云者夜側はらの笛の音を聞て嵆康が死後を思ひ出せし故事也

〔ち〕ちあるたち　漸に名の立也○

〔ぬ〕ぬくくつのかさなる　女の他姪する也○ぬかつく　ぬかは額なり禮拜するを云ふ

〔を〕をのがしゝ　思ひ〳〵の義○をちこち　遠近○をたける　女の暴々しく擧行を云ふ○をち　遠方人のをちあり

〔わ〕わくらは　邂逅の意○せくらば　病葉と書り春の頃紅葉したる葉を云ふ○わびしら　わびしき也○わるしく　分明也○わすれ草下紐につくる　忘草は甘草なり忘草を下紐につくるときは之を付て戀人の忘れんとするの意なり（以下欠號）

○食卓を飾る花瓶の手工

近頃西洋家屋の流行するに從がふて日本造りの家にても往々卓を備へ卓子を置き洋服を着する客人の設けの席となせり一体此の卓の上よは四季折々の花又は絹縮緬等にて造れる花を花瓶又は提籃に盛て飾れるが式あれども我邦の人は未だ之に訓ざると且つ四季毎に充分美麗の花を得ざるが故に此の飾りをせぬ人多し余は茲に女子の手製になる最とも艶麗しき花瓶の製作を記し四季の客人の目を慰さむる方法を教授すべし卓上の表飾は花の艶麗なるに若はなしと雖ども若し艶麗なる花のなき時は必らず美麗なる花瓶よて之を補なはざる可らず此の美麗なる花瓶を西洋にては珊瑚花瓶と云ふ蓋し其花瓶の色珊瑚樹に似たればなり

此の珊瑚花瓶を造らんとならば竹又は籐にて造れる籠花瓶の坐りよきを買ひ求め〔但し手製にてならば恰好は其意に任す〕次よ白色にして清潔なる蠟を土鍋にて容解ろの中へ朱を入て其色の珊瑚樹に類そるに至りし時夫の籠を土鍋の上よ翳し食匕にて其蠟を斑なく注き掛け全たく之を蔽ふに至りて已むべし即はち此籠花瓶は忽まち乾燥きて恰かも珊瑚の如くなるなり而る後ち花鈿の足なきを夥多求め枝となりし所の末を大

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なる針又ハ針金に縛しつけ之を珊瑚花瓶の表より位置よく裏へ貫ぬけば美麗なる花瓶となる之に眞の花を活んとせバ竹筒を入ると尋常の籠花瓶の如くすべし

○圖畫　（承前）

又線の末に筆の勢をひに由て深黒なる點の出來ものなれバ勉めて之を避くべし而して諸樹木を畫くにハ其筆鋒の觸る所ろ互に相異なるとなきを肝要とす尤とも其相異なる所ハ固より別に習慣の法ありと雖ども尚は各個に通常の樹木の形容を寫さんとを務むべし然れども是等の筆法の異なる所ハ唯其樹木の外線即ハち其樹木と天と相接する所ろの部分に於てするのみ而して諸樹の中心に濶大にして平滑なる塗抹を施こすべきが故よ其山水の圖に樹木を畫き出せ前に各個の別異なる筆鋒を試むべし而して水を畫くにハ其線を精密にして平垣なるを肝要とす然るを若し其線平坦ならされば其水ハ圖外に溢るゝ樣に見ゆるなり故に將に圖畫するに當りて水を畫くにハ最とも心を用ゐざる可らず而して暫時に摸ことを勉め且つ善良なる圖畫を手本として塗飾そるとの端正方法を學びし後ち自から天然の物品物体を觀て畫の稿きを始むべし是此技の眞正の用法にして且つ愉快なる所の者たり一体之を行なふ時ハ萬物を觀る毎に新たに悦樂の意を生ず故に此技藝に熟煉する者ハ眼の前に現ハるゝ諸物の千般の秀美なる所に人知れず目を注ぎ又種々の樹本技葉或ハ行雲及び激流の小川を見るに於て他人の嘗て得がたき快樂を心に生そるに至るなり然しながら萬物を見て直ちに畫稿を作るとハ其始めハ少しく困難なる業とす故に余ハ茲に畫稿を容易作るに必要なる寫法を云ん

（以下次號）

○啼鳥

鳥よ鳥よ汝ハ汝の地よ歩むべき足及び汝の雲に翔る翼ありて美麗なる動物なり且つ人の何の處に逍遥し何の處に居住するも汝ハ能く來訪そるとを得べし美麗なる鳥よ

此語ハ鳥類を飼ハん爲には善良なる原則よして鳥を愛撫する女子の記憶すべき語とす何んとなれば天地間に飛行する動物を捕て其自由の權を奪ひ徒らに自分の私情を樂しましめんが爲に之を籠中に養なひ僅かなる快樂を得せしむるに至りてハ及ぶだけの力を竭して之に安撫を與ふるハ鳥類を飼ふ人の其鳥の啼聲及び其美麗なる形を見て自分を娯しましむるの報酬と爲せハなり以下よ鳥を畜養そるに必用なる事件を記すべし

○月次御歌會　十二月五日　御兼題　冬神祇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○
神がきの手洗川もにはるらんいさくもさゆるすゞのおとかな　菫子

○
祝ぬしうつやひらでも寒からんしも凍る夜のかみのひろまへ　郁子

○
落葉ふむ人あとたえて神垣もなほ冬枯は脱れざりけり　正風
霜の色も月のひかりも白にさて廣前さむき小夜神樂哉　忠熈
少女らが神御衣ぬふと機殿の賑ふ冬になりにけるかな　建通
神垣の榊のうへにおく霜の白木綿さへも掛てけるかな　慶永
舞人の袖も寒けく見ゆるなり榊葉うたふ神のひろまへ　茂政
乙女子がたち舞袖にふる雪を面白しとや神も見るらん　承昭
神垣の松風たかく笛の音も吹合せてぞすみわたりけり　光勝
榊とり立まふ臣の衣手に散てそかゝれゆきのしらゆふ　愛子
三輪の山ゆきの白ゆふ掛てけり是も年ある驗なるらん　實政
穀ものをさまる御代の冬待て神を祭らぬ里やなからん　敦子
みしめ縄ゆひ改めし神垣にまづこそ掛れ雪のしらゆふ　道子
冬枯の野中にあをき木立こそ神の坐ます所ろなるらめ　爲忠
庭火たくかけ面しろく降雪の解やかみの心ろあるらん　定孝
榊葉につもれる雪のしらゆふは豐奉幣と神や見るらん　光善

瑞籬の紅葉もちりて御屋代のたそく高く顯はれに鳬　歌子
豐年をいはひて祭る神垣に手向けぬさと雪はふるらし　有住
御殿のかゝみにうつる白雪の淸きは神の心ろなるらん　安斐
あきらけき御代の日影をかざしにて新嘗祭けふの樂さ　通善
降雪に松も榊もうづもれてさやかに見ゆる神のひろ前　陳光
祝子がとる榊葉に降雪をしらゆふばなと神や見るらん　長延
年やすく過ゆくふゆに天地の神の惠もしられけるかな　忠順
榊葉につもれる雪の白ゆふは自からなる手向なりけり　公紀
なく霜を照せる月の影ふけて物音たかし神のひろまへ　忠實
神あそびほど近からし祝子が榊の枝にゆふかけてけり　基正
榊葉にかゝれる雪の白幣なびくもきよしかみのひろ前　國美
廣まへにすゝる新米にひしぼり手向て後に宴せんとや　重嶺
尊くも聞へけるかな大倭琴しも夜の月にさえ渡りつゝ　誠
冬の夜も明んとすらし御神樂の庭火の煙すへ白みゆく　巖夫
木枯の森の神垣ふゆがれて見えすく斗りなりにける哉　勤
新嘗の夜はふけぬるか瑞籬に深くも掛るしもの白ゆふ　稻子
宮人も神にまじり游ぶらんあな面白の夜半のかくらや　眞眞
降雪のふかき惠みに大御代を神も嬉しく守りまそらん　尙樹
御神樂の音しづまりて神垣の梢にのこる木からしの聲　景敏

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

以上明治十八年廿八日官報宮廷錄事

○慶新會の唱歌

慶應の四とせ正月の三の日いめ人の伏見に戰おこりし時石火矢々叫の間ょ奔走りて玉の緒を惜かなくせさせ給ひし小松宮伊藤大山山田佐々木の大臣 三浦の中將毛利の侯爵を始め武士の八十餘の人々が集ひて慶新會と云を設け年毎に竹芝の公園なる紅葉館に欒圍して宴を張る〻事となりしが去る三かの日も例しに由て酒盛せられたるが或る方様ハ慶新會の唱歌と云ふを作られて此を糸竹にのして侍女に歌ハしめ給ひしとかや

王政復古のそのかみを。おもへば凄し慶應の。三とせの冬の十二月。九日の日をはじめにて。都の空にたちかへる。春のひかりも烏玉の。世ハのりでもとみだれつゝ。あやめもわかぬそみぞれの。鞍馬よひゞく鯨波の聲。よろひの袖よかゞやくや。星の位も三台のかげうそれもくさしくしの。あのつきくらき鳥羽伏見。大内山の山風よ。錦の御旗ひるかへし。 大將軍のいでましに。勇氣いやますますらをが。 いくさ呼ひもいのづちと。轟ろきわゝる修羅のみち。きりつきふれつ阿鼻叫喚。ちしほに染る紅葉の。赤きこゝろをとりぐに。たふれかさなる屍ねハ敵か味方か彼れたれ時。踏したきもく戰場の。 ならひ常なき露の身と。のざすつるきのつかのまも君を忘れぬもの〻ふの。道のはてこそあはれなれ。天地もうごく震動に。炎さのまく淀の城。おほへる雲のふちまちよ。けむりすゑのかけろふも。きえて治まる君が代の。のどけき春よふちなどゐ。むのしのたりとすぎし世を。のたりつゝ酌むさかづきに老たるのけもかつ見もる。このうたけころたのしけれ

○盆栽告春　　神田　鬼谷

梅いちりん春の日あしに川れてさき

○御伽草

○風流の主從

和州郡山の藩士ょ池田正式となん呼べる人あり俳諧ハ貞徳の風をしたひ古今の達者なりしが其身輕き勤もえ遠近に名高き所名さえ探ぐること心にまかせず己が住居より幾許もあらぬ吉野の花だに見られじと打なげきて

ろばに居て見ぬやよしの〻そな乃先

此事いつしか主君の御耳に入り或時花見てまいれとて暇給ハりしかバいたく悦びて吉野山を。ある〻かしこと終日打めぐり手ごろの一枝折取りて主君へ出産に上りしのバ主君喜悦バれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て和歌一首を給ハりける
あし垣の吉野まじかく家居して問べき花よとハるべしとは

○實定冠落せし話

まあ定めて後の人の戯作ならめと思へども亦面白く可笑しき話しあり紀の貫之ハもと實定と呼バれしが或時如何なしけん御前にて冠を。ぽろりと落せしかば是ハ如何にと心の中いたく驚ろきしがさすがハ有名き歌人だけありて直ちに
今よりハ紀の貫之と召さるべし紀の實定が冠をとして
古へ御前にて冠落せバ罰せらるゝ例なりとぞ

○火を弄ぶ癖

よく火を弄る人あり亭主考へて今度から彼の人に出す火鉢よハ火箸をつけづよ出せと言付て置ける或時彼の客來りけれバ女房心得て火箸をかくして火鉢ばかり出しけるに暫ふく用談に時を移せしが其中話の途斷せしとき此客人火鉢を見詰めて口の中で何やらつぶやく故亭主耳を澄して聞くに此火をあちらへあの火をこちらへ
無くて七癖有て四十八癖と言へば慎みたきハ癖にこそ
まして女子をや

○西洋隠語

玆に物あり朝に當ては行動そるに四個の脚を用ゐ午後よ及んでハ唯二個の脚を以てし已に晩暮に至れば行動必らず三個の脚を勞する者あり汝之を如何なる者とす　人
解して曰く夫れ人幼稚のときハ匍匐行動四肢を以てし成長そるよ至りて直立行　動二　脚を以てし老衰必らず杖の輔助を假る

○仝

或他人の一婦人に問ふて曰ハく彼の男子ハ汝よ於てハ何等の親類で有りますかと婦人答へて曰ハく彼の男子の母ハ我母乃唯一人の子なりと〔吾子〕

○鶴の昔し語り

丹頂の雄鶴雌鶴よ向ひて鎌倉の由井の濱より和女と共に金短冊を付て此地へ飛て來たも最早六百年にも餘るだらうが月日の立ハ實に早い者でハないか　雌鶴　去ばに候。曾我兄弟の夜打も此頃の様にぞんじましたが思へば久しい事になりまそナ。夫の梶原さんハ意地の惡ひ人でしたか今に顔が赤いの知らぬ
雄鶴　鹿馬な事を云ものだ其時分の人が何で今まで生てゐる者か時に此池の龜殿ハ平生も御達者で若ん事だ　雌鶴　最幾歳になられましたでせう　雄鶴　去バなり大かゝ八千五六百歳にもな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

られたてわらし
人世ハ電光石火なり惜みても惜むべきハ光陰なり

◎机の塵

○筆のまに〳〵　三　　千束村みきを

○小間物屋の事
四方の硯花の巻に云商家よ小間物といふハ高麗物といふ事なり高麗をこまと訓するなり今も泉州堺よハこま物屋といふ名殘り高麗と書なり此地昔しハ異國船往來せし時よ彼の土の產物を交易したる時の名なるべし品物あまたあきなふ店を小間物屋といふハあやまりなるべし

○手形の事
好古日録下之巻に云古昔文卷上に手掌を印して證とせしより世俗文券を手形と云其文券今稀に存す

○月待日待ハ月　祭　日祭なる事
桂林漫録上之巻に云月待日待の待ハ祭なり津利の反知となるにて明なり子待ハ子祭なり余ハ推て知るべし

○懸想文の事
閑田耕筆巻之四よ云除夜に懸想文といふものゝ賣を買て元旦に是を開き其年の運をうらなふこと元祿の頃ほひまで有しならハしとぞ

○鴫立澤
西行の鴫立澤の歌ハ。もと澤邊に鴫の立てる秋の夕暮のいと淋しく物哀れなるさまを詠せし實景の歌よして鴫立ハ澤の名にあらざるを元祿の頃宗雪居士が一時の思ひ付にて。この所こそ西行法師の鴫立澤と詠歌せし澤なりと附會せしを〔戸田茂睡が著せる名所不審相承歌といへる小冊子に。今大磯の鴫立澤などゝも近き頃宗雪といふ入道が名付たる事なれども西行法師の。身にも哀れハ知られけり。と讀給ふ所となれりとあり〕寶永年中俳諧師の三千風遂に庵を結び鴫立庵と稱し。いかめしく碑など立しより〔碑にハ元祿十三曆辰二月望日東往居士三千風記之とあれども。これハ元祿十二巳卯年西行五百年忌の追福を修せし時の碑文にして碑石の立しハ寶永年中にあり〕今ハ和歌の一名所舊蹟となりたり。　〔善庵隨筆〕

記者曰く善庵の論する所ろ左もあるべし。然しながら西行が詠歌を以て遂よ所の名とせしハ風流此の上なく且つ斯る例しハ和漢ともに少なからざれば強がちに咎むべきに非ずかし但し鴫飛を佇立と思ひ誤りしハ余ハ之を咎さるを得ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎つれ〴〵草講義　任天居士

●さえなくなり　無才なり也●しなくだり　品位容貌の劣ろへ来るなり●かけすけ　齒牙に掛ぬとにて人が取合ぬ義●文の道　讀書學問の道●管絃　音樂のと●有職　故事典故に明らかなるを有職と云ふ●公事　朝廷の儀式を云ふ●人の鏡　唐書。魏徴薨太宗臨朝歎曰以銅爲鏡可正衣冠。以古爲鏡可知興替以人爲鏡可明得失朕常保此三鏡内防己過今魏徴逝一鑑亡矣●はしりがき　眞書は衣冠正しき体。行書は歩行体。草書は人のはしる体なり●いたましう　他に關はらぬ義

〔二段〕古の聖の御代の政　をも忘。民の愁國のそこなはるゝをもしらず。萬にきよらをつくしていみじと思ひ。ところせきさましたる人こそうたて思ふ所なく見ゆれ。衣冠より馬車にいたるまで。有にしたがひて用よ。美麗をもとむるなかれとぞ。九條殿の遺誡にも侍る

●古の聖の御代　支那にては堯舜文武日本にては延喜天暦或は仁徳の朝を申すべきか●きよら　清の字花麗なる義●ところせき　所狹おごり散したる意●おもふところなく　物に執着なき也心ろにくのふぬ義●衣冠　是より九條殿の辭なり●九條殿　右丞相師輔公を云ふ遺誡一巻あり

◎内外雜報

◎御年賀　畏こき御事ながら我　皇后の宮には去ぬる三日午後に御苑つゞきにて青山御所へ成せ給ひ新年の御賀を　皇大后の宮へ申させさせ給ひたりとうけ給はりぬ

◎結婚條例　豫て世間に其沙汰ありし結婚條例は舊參事院に於て起草されしが舊冬同院を廢され其事務は悉く内閣法制局に移されたれバ今度同局に右調査委員を置かれ更に起草に着手せらるゝとぞ

◎舞踏會　府下大井村八景園の内に設けある舞踏演習所は追々盛んになる有樣にて目下集まる生徒は百人に近く其中最とも多きは新橋の歌妓にて柳橋は道の遠きゆゑか三人に過ず芳町は之に亞と云ふ舊を棄て新に遷る世の習ひ酒宴の客に侍して舞踏するは目新らしけれど日本流の二階家にて舞たらせんには樓主はさぞかし迷惑ならん

◎馬の乳　客歳大學醫學部に於て試驗の爲め馬の乳を分析せしに人の乳に差して違ひなく牛乳よりは養分少なきを以て小兒には却つて牛乳に優るならんと撿定せられたりと一体馬の乳を牛乳に換用するは印度安南地方に行なはれ未だ我邦になき事ゆゑ人の体に適するや否やの爲に試驗されしなりと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

廣告

農學士菊地熊太郎編述
○化學理論一班　全一册
定價金二十錢
郵便税金六錢

嶋津倉治編輯
明治
○新刻日本溫古類聚　全壹册
定價金三十錢
郵便税金六錢

小池民次序
馬場壽著
新撰小學遊戲書　全一册
洋本仕立小本　挿密圖
定價金拾五錢郵税金四錢

千葉本町壹丁目
立眞本舍

東京大賣捌所
績文舍

新版豫約廣告

米國バーリー氏原著　戸代光大先生譯述
容易
獨修　萬國史直譯

亞細亞亞非利加之部全備　一册
西洋綴紙數凡二百余ページ○定價四拾錢

豫約特別廉價廿貳錢

(豫約期後賣價三拾錢)至急三千部豫約來十九年一月廿五日
出版豫約申込來十九年一月廿日限歐羅巴以下來十九年二月
ヨリ着手
本書ハ方今江湖ニ流布セル直譯或ハ獨案内ノ譯字ニ番號ヲ附
シタル迂遠繁雜ノ弊アル類ニ非ズシテ至便有益ノ方法ヲ以テ
譯述シタル者ナレバ讀者ヲシテ英學獨修ノ便ヲ感ゼシムル夥
多ナルベシト確信ス請フ英學篤志ノ諸彥一閲シテ此書ノ容易
獨修ノ名ニ背カザルヲ知ル處アレ
御禮の為廉價發賣

西村茂樹先生撰

新撰百人一首　一册

物彩色近古無双美本特別直引價九拾錢
黒摺(無彩色)美本特別直引價四拾五錢
右ハ先年出版以來愛顧諸彥ガ近古無双ノ美本トシテ陸續御購
求被下數千部賣捌候ニ付御禮ノ為本月廿日ヨリ來一月廿日迄
前記非常ノ廉價ニテ賣捌候間御購求可被下候

東京本町二丁目　中外堂
千葉本町　立眞本舍

弊舍ハ數十年來活版印刷と書籍出板とを兼業罷在り因て他
店の書籍と雖とも御注文有之ときハ其店にて賣る價を(割
引ある の品ハ其店の割引の通り)以て御取次仕候尤無手數
料なり又女學叢誌御愛看諸君に限り東京府下千葉縣下出板
書籍御購求上にて御尋有之節ハ郵券二錢御遣わらば諸店問
合の上懇切に御回答申上候也

東京々橋區南鍋町
貳丁目拾壹番地
績文舍書籍掛敬白

發行所
東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地
績文舍

持主兼印刷人　松本義弘
編輯人　山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地　大賣捌所　修正堂
同　神田區淡路町　巖々堂
同　神田區雉子町　團々社
同　日本橋區新葭町　長明堂
同　牛込肴町十七番地　活神堂
同　芝區愛宕下町二丁目　高覞堂
同　蠣売町貳丁目　信文堂
同　本郷區本郷三丁目九番地　盛春堂倉田
大坂府備後町四丁目　岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目　立眞舍
上總國武射郡松尾　高林銀藏
江州彥根西内大工町　新々堂
勢州津京口町　都文堂
陸前國仙台大町四丁目　木村文助

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY